

# フクシマ原発事故の現状 と私たちの課題

資料室報 NO99号

2011・9・10

## 炉心溶融から半年

いつにないほど猛烈な暑さが続いた今年も、すでに秋に移り始めているが、酷暑がピークの8月6日はヒロシマ、9日はナガサキで、人類史上初めて核兵器が市民に対して使われた日である。

まさに生き地獄さながらの日から早くも66年の歳月が流れた。

このヒロシマ、ナガサキでの原爆死没者慰霊式に参列し挨拶した菅首相は、原発事故にふれて「…原発への依存度を引き下げ、原発に依存しない社会を目指す…」と述べたのであった。

すなわち、首相として「脱原発」を再度言及したのである。

私たちは66年を経たとはいえ、一瞬にして幾十万の命を奪ったばかりか、たとえ生き残ったとしても被曝<sup>ひばく</sup>によって、やがて命を奪われてしまう、残酷・非道な行為を決して忘れることは出来ないのだ。

この地獄<sup>じごく</sup>絵さながらのヒロシマ・ナガサキの日から僅か9年後の1954年3月、中部太平洋の美しい島ビキニ環礁<sup>かんしょう</sup>で米の核実験が行われた。原爆よりも遙かに強力な破壊力を持つ水素爆弾（※-1）の実験であった。

この実験によって、付近で操業していた

日本のマグロ漁船第五福竜丸が、死の灰（※-2）を浴び被曝した。

帰港後に乗組員は入院して、そのうち1名が死亡する事件が発生している。

そのビキニ被曝から約半世紀が経った2011年3月11日。大地震を引き金とした大津波がフクシマ第一原発を襲い、原発事故史上空前の大事故が引き起こされるのである。

この一連の事態について、ヒロシマのある高齢な被曝者は次のように述べている。「一度目二度目は外国人によって、三度目は日本人自らの手によってだ！」と言い放っている。

このように核による被曝は今日まで幾度となく繰り返されている。

フクシマの場合被曝ばかりか、住む所も奪われ、耕作する農地からも離れなくてはならないという事態がたくさん発生している。

それだけではない。徐々に身体を蝕<sup>むしば</sup>む放射能は不気味に直接的にも間接的にも身体に害をもたらし続けるのである。

私たちはフクシマ第一原発事故の今後について、いや日本の原発の今後について考え、行動しなければならない。

ときあたかも被曝66年に際して、新た

なる決意を込めてノーモアヒロシマ、ナガサキ、そしてノーモアフクシマと声を大にして叫ばなくてはならない。

## 核兵器と原発

フクシマ第一の事故で被曝による死者は直接的には出てはいない。

しかし事故によって放出された膨大な放射性物質は、第一原発を中心に広範囲にわたる大地や、空、海を取り返しがつかないほど汚染してしまった。

このように私たちは、1945年8月、人類史上初めて核兵器に見舞われ、その惨たらしいばかりの破壊力、殺傷力と被曝によって多くの人々が殺された。

次に1954年3月、水素爆弾の実験による被曝を受けて犠牲者を出している。

そして今次フクシマ第一原発の事故は、三基もの原子炉が次々と炉心溶融に陥り、更に水素爆発を引き起こすという前代未聞の事故に陥ったのであった。

私たちはこのように核による被曝に、繰り返し(※-3)さらされているわけである。

たしかにフクシマ第一原発事故では被曝による犠牲者は直接的には出てはいない。

とはいえ原発に働く労働者達には限度を超える被曝が多く発生している。また、設定された周辺の警戒区域や、30<sup>キ</sup>を超える地域でも汚染濃度が高い地域の人々は、強制的な避難を強いられているのだ。

そして低濃度の放射能を浴び続けている人は数知れない。

ところで、私たちは兵器としての「核」の存在と、平和利用としての原発に様々な

事を感じている。

例えば「核」は兵器として戦争に勝つための手段として、国家が莫大なる資金(予算)をもって研究・開発したものである。

戦争を有利に遂行する手段として造られた核兵器は次第に強力になっている。

それは破壊力を高めて、いかに多くの人を殺すことが出来るのか!ということを目的にして開発されているからだ。

この開発の度合いを検証するのが核実験である。

かかる実験によっても、私たちを含め世界全体の人々が大きな被害を被っている。

核兵器を保有している国々は、まるで悪魔の化身としか言いようのない核兵器の保持を正当化するために、次第に核の平和利用を打ち出しはじめたのであった。

これが原子力発電=原発なのである。

すなわち私たちから言うならば、核の平和利用とはヒロシマ・ナガサキで実証された核兵器の非人間性を覆い隠し、核兵器を持ち続けるために、原子力発電として登場させるということだったのである。

あるいは次のようにも言えるであろう。核兵器に用いるために生産されたウランやプルトニウム、その技術を今度は商業用に転用・消費するために開発されたものが原発である。

しかしながら核は人間がコントロール出来なくなるほど危険な存在(※-4)であることは、原発のごく短い歴史の中で重大で危険な事故が繰り返されていることから判明する。

そして何よりも強調しなくてはならない事は、人々に重大な被害と影響をもたらすだけでなく、私たちが生きている場、か

けがない地球そのものを被曝させ続けているという事である。

## 安全神話の呪縛

いま私たちはフクシマ事故による放射能の害に直面している。

その場合、私たちが長年にわたる「安全神話」の微温湯<sup>ぬるまゆ</sup>にひたっているために、知らず知らずのうちに原発に対する危機感が薄<sup>うす</sup>れてしまっていることを否定的に自覚しなければならない。

こうした自覚をバネとしてフクシマ第一原発事故に立ち向かわなくてはならない。

すでに福島県では全県民 200 万を対象とする医学的な被曝調査が行われようとしている。

まず立ち入ることを禁じられた地域に居住していた人々について、内部被曝などの調査が行われ、すでに相当数の内部被曝者が明らかにされているのである。

かかる状況の下で深まる危機感と不安感を背景として、いま脱原発<sup>だつしゅく</sup>、縮原発<sup>しゅくげん</sup>、減原発<sup>げんげん</sup>、あるいは卒原発<sup>そつげん</sup>とか原発ゼロ、反原発などと従来にない様々な声が大きくなっている。

だが述べたい事は、一体どれが正しいのか！などではない。

私たちにとって重要なのは、今まで己が感覚していた「原発は仕方がない」と言うような価値観を、まず自分でぶっ壊してフクシマ第一原発事故に対決していくことが必要なのである。

すでに過去数千回以上も繰り返された核実験と、現在では世界で 500 基以上も稼働<sup>かどう</sup>している原発から生じているおびた

だしいまでの放射性物質や関連する核廃棄物によって、人類は取り返すことの出来ないほどの地球規模の核汚染をもたらしているのだ。

この危機感を怒りに転じて、私たちはフクシマ第一原発事故を否定的な契機<sup>けいき</sup>として、広範<sup>こうはん</sup>に存在している核や原発に対する本能的な危機感を把握し共有し、これに踏まえて闘わなくてはならない。

## フクシマのいま

「炉心溶融（メルトダウン）などの事故はありえない！」と言い切るばかりか「もしあるとしたら、どこかの野球場に隕石<sup>いんせき</sup>が落ちる確率よりも低い程度」などと豪語<sup>ごうご</sup>していた原子力村（※一5）の面々の言葉とは裏腹に、三基の原子炉が次々と炉心溶融や水素爆発を引き起こし、今でも放射能を撒き散らしているのがフクシマ第一原発事故である。

その際には、「兆<sup>けい</sup>の一万倍」である「京」単位の放射線を撒き散らしただけでなく、破壊された原子炉<sup>たてや</sup>や建屋<sup>げんざい</sup>から、現在でも 2 億ベクレルもの放射線を周囲に放出しているのである。

実際にフクシマ第一の敷地内では、事故から五ヶ月経過しても未だに毎時 10,000 ミリシーベルト（10Sv）を超える放射線を発している箇所が見つまっている。

この場合は、使用した計測器のリミットが最高で 10Sv であったために針が振り切れてしまい正確な測定値は明らかにされてはいない。

人間が一度に 3,000 ミリ Sv を浴びた場合の死亡率が 50%と言われ 7,000 ミリ Sv 以上では 100%死亡するのであるから、

とてつもなく危険な状況が今も存在しているのである。

## 収束と工程表

事故から約半年が過ぎた今、政府や東電は事故の「収束」に関しての計画について、収束の為の過程的な行程などを一応は示している。

すなわち工程表による「収束」の見通しについてふれたい。

しかし、私たちは「収束」について、単なる言葉や願望ではなく、収束させるための具体的な手順について確認しなくてはならない。そのためにこそ半年を経た今日の状況について、出来る限り把握しておく事が必要なのである。

この時点で明らかにされている工程表の目的は、事故の収束ではなく、炉の冷温停止(※-6)におかれていると言えよう。

しかし収束が一番大切であることは言うまでもない。

いまフクシマの事故で深刻なことは、次のような問題である。

第一には、放射性物質の半減期が途方もなく長い現実から、危険な放射線からいつになったら自由になれるのか？という不安。

第二は、まるで現代の流浪の民となってしまったかのように、危険圏内の人々が故郷を追われて全国に散っている現実、はたして再び戻れるだろうか？という不安。

第三には、大地や海の汚染による農業や漁業の耕作と操業が出来ないための不安。仕事を失い収入が絶たれるのだ。

自然に働きかけて得る農作物や魚貝類はこれから一体どうなるのであろうか。

そして第四には、フクシマ第一原発を中心に相当の距離にあっても飛散した放射性物質がホットスポットを形成し相当高い放射線を発していること。

こうした事態によって内部被曝を含む被曝について多くの人々が、言い知れぬ不安感に襲われているという事である。

私たちはかかるような厳しい現実を見つめつつ、政府や東電による「収束」に向けた「工程表」の問題点について捉えなくてはならない。

## 壊れた原子炉は

では壊れた原子炉の現状について見ておこう。「収束」について確かめる為である。

言うまでもないが事故を起こしたフクシマ第一原発には6基の原子炉がある。

このうち1～3号機が地震発生時には運転中であった。

4～6号機は定期検査中であり、それぞれ燃料プールに核燃料棒が冷却、保存されている状態にあった。

この6基の原子炉のうち1～3号機が全電源喪失によって冷却水が減少して次々に炉心溶融(メルトダウン)を引き起こし、更に水素爆発を引き起こしたのである。

他方定期検査中であった4号機については燃料プールが冷却不能となりプール内の燃料棒が高温化して発生した水素ガスが爆発事故を引き起こしている。

(最近になって東電は「3号機で発生した水素ガスが4号機に逆流して爆発した」と発表している)

かくして原子炉が3基もメルトダウン

してしまい（1～3号機）しかも水素爆発（1，3，4号機）してしまうという世界でも類例のない事故となったのである。

また事故となったフクシマ第一原発の各原子炉や、日本で稼働している原子炉は相当の経年劣化が進んでいるということである。

このために政府は法律を変えて耐用年単の延長をはかり、電力会社は原子炉の延命工事に躍起となっているのが現状であった。

こうした中でフクシマ第一原発事故が発生したのである。

実際にフクシマ第一原発の1号機は運転歴40年を数える国内でも最古参の属する原子炉であった。

さて、事故の時に稼働していた1～3号機のメルトダウンに関してであるが、溶融した炉心内部の状況はそれぞれ異なるようである。

各炉とも空焚き状態に陥り高温となって溶けてしまった核燃料棒が落下し、そのために圧力容器に穴が開いて、そこから溶けた燃料棒が格納容器にたまっている、と推定されている。

かかる事態について、東電は当初は炉心溶融（メルトダウン）については認めようとはせず、炉心の「損傷」などとしていた（3月中頃段階）

しかも5月になって燃料棒の損傷率について各燃料棒が30%～70%溶損したと発表し、5月中旬になってようやく炉心溶融についてしぶしぶ認めるような態度であった。

このような態度を取る原因は、とにかく炉の内部がどうなっているのか？が依然

として高い放射線が存在しているために確認出来ないという事である。

東電や専門家達は危険なレベルの放射線のために、詳しく調べることが出来ず、ロボットなどによって遠隔的にしか把握できず、従って正確な炉の状況が8月下旬になっても分からないのである。

かくして8月の段階では、もっぱらフランスやアメリカ、そして国産の放射性物質除去装置（サリー）を稼働させて、高濃度に汚染されている冷却水を浄化し、循環させてとにかく炉を冷却することに懸命である。

けれども作業はひっきりなしに発生するトラブルに手を焼いて、試行錯誤を重ね、とにかくまずは原子炉を冷やすこと、冷温停止に向けて懸命になっているのだ。

フクシマ第一の各原子炉の状況について8月21日段階では以下のようなようである。

**1号機** メルトダウン、損傷箇所から漏出、爆発防止のため窒素注入。圧力容器下部温度90℃、建屋内放射線23～5,000<sup>ミリ</sup>Sv、汚染水17,020<sup>トン</sup>

**2号機** メルトダウン。損傷部分から漏出、圧力容器底部温度113℃ 建屋内放射線5～430<sup>ミリ</sup>Sv 汚染水29,300<sup>トン</sup>

**3号機** メルトダウン、損傷部分から漏出、窒素注入、圧力容器底部温度109℃、建屋内放射線10～186<sup>ミリ</sup>Sv、汚染水29,300<sup>トン</sup>。

**4号機** 燃料プール補強、建屋内放射線0.1～0.6<sup>ミリ</sup>Sv、汚染水21,700<sup>トン</sup>という状態である。

とにかく約10万<sup>トン</sup>にも達する高濃度の汚染水が問題となっている。

炉を冷やすために冷却水を入れれば、そ

の分だけ汚染水が増加してしまうのであり、これを解決するために放射性物質除去装置を懸命に使っているのである。

## ヒロシマの168倍

最近になって続々とデータなどが後出しされている。

とりわけ原発からの放射性物質の飛散状況について、いわゆるホットポイントの存在とか、すでに15都道府県に拡散していることが示されている。

特に注目すべき事象として8月1日に東電が発表したフクシマ第一原発の敷地内において毎時10Svの放射線量が測定された事についてはすでに述べたが、計測器の針が振り切れるほどの致死量を超える放射線の存在はまさに恐怖であろう。

この原因については、事故によって冷却出来ない原子炉を守るために行ったベント（排気）の時、炉内の猛烈な放射性物質が配管を通して外に排出する際に付着したものとされている。

すなわちベントによって膨大な放射性物質（兆でなく京のレベルの単位）が大気中に出されたという事である。

その残り滓がいまも10Svの放射線を放っているのだ。この事実こそ戦慄すべきではあるまいか。

ある原子炉工学の教授は「…溶けた燃料棒の粒子がベントや水素爆発の際に一気に蒸気と一緒に出た可能性がある…」などのべているのだ。

重要なことは10<sup>3</sup> Svの検出もさることながら、さらに多量の粒子（放射性物質）が外部に京のレベルで放出されてしまっている事実こそ重大なのである。

非常手段でもあるベントや、ありえない水素爆発というショッキングな最悪の事態について、当時の官房長官は次のように述べていたことを私たちは想起しなくてはならないだろう。

すなわち政府は、「…爆発によって格納容器が破損していることが確認されているとの報告を受けた。しかし放射性物質が多量に漏れ出すものではない。

ベントの際に放射線量はいったん高くなったがPM3・36の爆発をはさんで、いずれも低下し、低いレベルにとどまっている。現時点で爆発前からの放射線物質の外部への出方に大きな変化はない」

またベントによる炉内圧力の放出に関しても「…身体に影響を及ぼさない程度の微量の放射性物質は含まれる」（3月12日午後18時と21時の記者会見、朝日3・13）

この発表が事実については全く隠蔽されたものであることが判明するだろう。

実際東電はその後、放出された放射性物質の量は「事故直後の3月15日に比べて現在は約250万分の一にまで減っている」などと述べているのである。（日経7・20）

要するに当時は今よりも250万倍もの放出があったということである。

官房長官の発表とはまったく異なることを東電が述べているのである。

半年近くたった時点で、致死量を超える放射線を放つ放射性物質が残っているのであるから、これよりはるかに多量の放射線物質が当時放出されたことは明らかであろう。

だから保安院などは最近の8月26日になって「フクシマ第一原発事故で放出され

た放射性物質セシウム 137 は、ヒロシマに投下された原爆の 168 倍に相当すること、ヨウ素 131 は 2.5 倍にあたる」という驚くべき事を明らかにしているのである。(朝日 8・25、東京)

それだけではない。文部科学省なども最近になって、フクシマ第一原発に近い地域での「積算放射線量」について、その値が最高で 508 ミリ Sv を記録している事を明らかにしている。

因みに、職業で放射線を扱う人の年間許容量は法律で 20 ミリ Sv と決められおり、一般の人の許容量は年間で 1 ミリ Sv とされているのだ。

このように都合の悪いことは隠蔽するか後出しにするのである。

## 様々な原発論の登場

私たちは事故は無論のこと、原発についても大きな関心を持っている。

いまフクシマ事故を契機として原発をめぐって、信じられないような現象が起こっている。

例えば朝日新聞などは、突然“脱原発”を宣言する社説を異例なほどの大ききで掲載したりしている。(7月13日)

これまでメディアとして原発推進の提灯持ちであった事などはすっかり忘れているようである。

と同時に末期症状を呈していた菅首相も同じ日に「脱原発、原発のない社会を」という方針を記者会見で述べ、さらにヒロシマ・ナガサキでもそれを述べている。

かくして同じ日に、朝日は社説で、菅首相は記者会見で、まるで機を一にしたように「脱原発・原発のない社会を！」と主張

しているのは決して偶然ではあるまい。

だがしかし菅首相は退陣し、朝日の決意も以降は尻つぼみである。

そして菅首相の場合、翌日になって「あれは個人的見解である」などと国会で弁明するような体たらくぶりであった。

しかしここで注目しなくてはならない事は、今までになかった“脱原発”ということがフクシマ以降急速に高まっている事実に注目するのである。

すでに述べた通り脱原発、あるいは縮原発という言葉も産まれたり、そして卒原発などと過程的にのべる説も登場している。

あるいは減原発などと一挙ではなく除除に減らせばいいという主張もある。

ごく最近まで、いや正確には 3・11 前には、脱も、縮も、卒や減なども全く無かったのだ。

存在したのは原発推進であり、エネルギーの安定的供給論であったのだ。

そのために原発増強策こそが強く存在していたのである。

急に脱原発を言い出して退陣した菅首相こそは原発増強に尖兵でもあったのだ。

実際に菅首相が閣議決定したエネルギー基本計画を見れば良い。(昨年6月)

そこには 2030 年度までに、エネルギーの構成を化石 26%、原子力 53%、再生可能(自然) 21%として、とくに原子力については 07 年では全体の 26%であったのを 2030 年度には 53%に倍増する計画を閣議決定しているのだ。

このために 14 基以上の原発を新設することとしてすでに工事化されている原発もある。(フクシマ第一でも新たに 2 基も新設される計画であった)

こうした原発増強をメインとするエネルギー政策をひっくり返して脱原発を言い出すこと、あるいはそれを言わなくてはならないほどフクシマ第一原発の事故は強烈で衝撃的な事態であったということである。

だから、たとえ駄目な首相の個人的な見解であったとしても「脱原発」を主張する、あるいはこれまで原発を尻押ししていたメディアが、社説で「脱原発」を突然掲げるという現象について私たちは考察するのである。

さて脱でも良い、減・卒・反でも良いだろう。

だが問題なのは、これまでのエネルギー政策に無関心であったために知らず知らず電化生活という環境に慣れてしまい、そのことを当たり前のように感覚してしまっただけで、便利さに安住していた事を考え直すために、様々な原発論を考えれば良いのだ。

ところで、これまでの態度をコロッと変えて、まるで菅首相や朝日新聞のように、「原発ゼロ」を突然叫び出したのが日本共産党であった。

すなわち7月23日かの浜岡での集会において志位委員長は「原発ゼロ」を主張し出しているのだが、ご都合主義者よろしく、これまでの原子力発電に依拠して、「急に無くすことは出来ない」などとしていた態度から一転しているのである。

それは共産党として世論の動向などを勘案し、原発ノーとした方がとくとく考えて打ち出したものである。

この浜岡集会の直前（7月21日）に外国特派員協会で講演した志位委員長は「安全神話の問題や原発の持つ異質の危

険性（制御できない）や原子力村の形成については原発利益共同体だ」などと問題点を今更のように打ち出して「エネルギー政策をめぐる財・官・政・学・マスコミのペンタゴン構造」などと、まったくの一周遅れで取り上げて、「原発ゼロの日本を」などと言い出しているのである。

原発ゼロでも構わないけど、いままで「原発について一挙に無くすことは出来ない」などとしていた態度はどうするのか！と問わなくてはならない。

要するに共産党は「広汎に存在する原発に対する否定感」つまり多くの不安感などに注目して、それを取り込むために懸命になっているだけである。

さて私たちは、このように今では、脱、反、縮、卒、ゼロなどと様々な意見が従来には無いような雰囲気の下で形成されていることに注目しなければならない。

しかし言いたいことは、どれが一番正しいのか？では決してない。

フクシマ第一原発では今も放射線を撒き散らしているのであり、日々蓄積される放射線の問題を直視して闘うために、取りも直さず己のこれまでの原発に関する価値観を鋭く問わなくてはならないのである。

## 弱者の犠牲と原発

いま全国に54基もの原発がある。それぞれが建設されている場所は、いずれも海に面した過疎な所にある。

そして原発は必ず弱者を犠牲にして造られている事を私たちは知らなくてはならない。

零細な農漁民の生活の糧である、農業、

漁業によって生きている人々を、わずかな金でそれを奪って原発は存在している。

若干の雇用を原発の周辺事業に吸収しあるいは電力三法による交付金を一定の使用目的を定めて交付しているのである。

こうして原発は過疎である海辺につくられるのである。そのほうが反対運動などを封じやすいからだ。

こうして弱い立場の人々を犠牲にした上に原発が成り立っていることがわかるであろう。

原発による電力供給が損なわれれば、日本は産業が停滞してしまいGDPが減少する。そのために産業の空洞化が進み、雇用が維持できなくなる、などと経団連などはしきりに恫喝しているのである。

彼等は安定したエネルギーの供給によって企業の利益が保証されればそれで良いのだ。

だからメルトダウンしようが、10Svの放射線があろうとも、彼等は生産が滞らなければそれで良いのだ。

このように弱い立場の人々を押しつけてエネルギーを確保することに懸命なのである。

こうして原発は、弱い立場の人々を犠牲にして成り立っているものであり、その電気を使って生産活動を高めて利益を上げて国際競争に打ち勝っていく。

このような観点から経団連は、原発をエネルギー供給の手段として、地震国である狭い日本に原発を林立させているのである。

だからいくら危険であろうとも、止まっている原発を再稼働させたいのだ。

すでに野田新首相もそのように言明し

ているのではないか。

だが原発の安全神話すなわち、安全・安価・クリーン、が全くの虚言であった事がフクシマ第一原発の事故で明らかにされてしまったのである。

だから私たちは断じて反対である。

安全で人に優しいエネルギーを確保するために、すでに決定されたドイツやイタリアなどヨーロッパ諸国の脱原発政策を先例として学ぶべきであろう。

彼等こそいち早くフクシマ第一原発から学んでいるからである。

## 註

### ※ ー1 水素爆弾

核融合を応用した爆弾。原爆を起爆剤として重水素、三重水素、リチウムなどを核融合させる際に強烈なエネルギーと大量の中性子を放出する。

### ※ ー2 死の灰

核兵器の爆発、または原子炉内の核反応によって生じる放射性物質の通称。ストロンチ90、セシウム137などは直接、間接的に人体に害をもたらす。

### ※ ー3 繰り返して

このほかに東海村におけるJOCによる臨界事故での被曝が発生し、2名の労働者が亡くなっている。

※ ー4 危険な存在

原子を構成する原子核はものすごくナノの世界であって、人間が生み出した技術ではコントロールすることが不可能という説も多い。原子核での現象は技術では制御不能となる、と言う科学者も多い。

※ ー5 原子力村

原発や原子力政策に群がる学者や官僚、それを擁護する人々のこと。

※ ー6 冷温停止<sup>れいおんていし</sup>

普通、冷温停止とは原子炉の冷却水温が100℃未満になることであるが、この7月に新しい目安として「压力容器底部の温度が100℃未満になることと、炉から大気への放射能の漏れがゼロに近づくこと」を東電と政府が決めている。